悠久の河

周藤彌兵衛翁物語 1

村尾　靖子

周藤彌兵衛

今から三百六十年ほど昔。

災害から村と村人たちを救うために、立ち上がった庄屋の一族がいた。

のどかな村を取り囲むように流れる意宇川。

日頃は村の民に幾多の恵みを与える川も、大きな岩山が張り出し、水の流れは曲がりくねり、流れが細くなっている場所が有ったため、一度、大雨に見舞われると、川の流れは濁流となり、村を呑み込んだ。

家屋は喪失し、多くの人命が失われ、村は壊滅寸前となった。

災害に怯える村人たちを目にして、生涯をかけて岩山と格闘する決意をした庄屋、周藤彌兵衛。

「村の民の幸せが無ければ、庄屋の幸せは無い」との思いから、身代をかけて、岩山に挑むこと、実に四十二年。

現代社会にも通じる彌兵衛の願いとは、精神とは、行動力とは…。

画　高田勲

カチーン、カチーンと乾いた音が絶え間無く日吉村の空気を震わせた。

この地方は、もう何か月も雨の降る気配さえ無かった。村に添うように流れる巨流、意宇川の流れは、すっかり細くなり、荒い岩肌が、厳しい旱魃を思わせた。

やっと五歳を迎えた少女、つるは川底からのぞいた岩に腰掛け、足を水に浸すという動作を飽きもせず繰り返していた。

肌を焦がすような夏の強い日差しが川面を照らし、鏡の表面に当たった光のように屈折して剣山の岩肌を無数の光の玉が走った。

意宇川の左岸から川の中央部まで突出して川の流れをくねらせている岩山をこの村の人々は剣山（つるぎさん）と呼んだ。

光の玉の行方を追いながら、つるの目は岩山の老人の姿をしっかりと捕えていた。

「お、じ、い、さまー」

「おじいさまー」

つるは岩山で一心不乱に大槌を振り上げている老人に呼びかけた。

「じいさまー。少しだけ、休みなさらんか」

つるは握り飯の包みを高く振りかざして見せた。

老人の日焼けした髭面が、ゆっくりと振り向いた。

老人の名は、周藤彌兵衛。出雲の国、日吉村（現在の松江市）の庄屋の三代目である。

彌兵衛が、たった一人で剣山に籠ってからすでに数年の歳月が過ぎていた。

■クラウドのさきがけ――総合水管理システム「やくも水神」の小松電機産業 提供